第 35 回神戸大学山口誓子学術振興基金公開講演会　2024 年 9 月 21 日

演題「早く逝きし俳人たち」―人は何故詠おうとするのか

樽見　博（日本古書通信編集長、「鬣」同人）

１，自己紹介

昭和 29 年茨城県生まれ。1979 年日本古書通信社入社、2008 年から「日本古書通信」編集長、同人誌「鬣」（2001 年創刊）に 2009 年 5 月から参加，俳歴 15 年

２，「日本古書通信」と古書業界

神戸との関係、創業者八木敏夫は育英商業出身、新刊書店福音舎勤務後、上京して古書業界へ

３，古書業界の使命

書物を残し後世に伝える、個人・機関による収集の意味。

４，『戦争俳句と俳人たち』『自由律俳句と詩人の俳句』

古書を扱う者の側からの視点、俳句史を出版の面からも見る。俳句雑誌の意味。

５，早く逝きし俳人たちの存在

勝れた語り部を持った芝不器男、片山桃史、尾崎放哉

山口誓子の「序文」から中西其十を知る

「結核」「戦死」と言う宿命・不条理

６，不思議な出会い

田中青牛の場合、松本青志の場合（『句集青土』山口誓子文庫所蔵）

７，荻原井泉水主宰『層雲』の早世自由律俳人

大橋裸木と河本緑石

８，実社会に出る前の早世

堀徹、藤田源五郎

９，高柳重信の影で

本島高弓、柏原鷹一郎の業績

10、俳句界における「学歴」の意味（？）

「寒雷」創刊の功労者鎌倉鶴丘

11、通説、偏見の壁

高橋鏡太郎、和田久太郎

11、まとめ

早世の俳人たちが俳句で表現しようとしたものは

早く逝きし俳人たち十句選

●中西其十

水底の雲の深さよ芹まばら
見てあればやさしさもなし金魚の瞳
白牡丹に漂ふ光いづこより
空桃色にふけゆけば光る秋の雨
秋の宵我が息の音に息を深め
鵙鳴くや巨木夕焼にそゝり立つ
そのおもひ出人こそしらね稲の花
宵しぐれて人ひそみけり五條坂
山影のひろごりつきし枯野かな
熱涙が頬にまよひ来て氷らんと

●田中青牛

蜩や森の空なる星一つ
子の赤い足袋大きくてすましけり
春愁や髯そりのこす顎の下
溶けそうにある乳色の夏月夜
海棠の葉になる雨に明けにけり
はしり動くブリキ玩具や秋の風
飛ぶ虻の陽に散らしたる花粉かな
提灯の顔にあつめたり虫とる子
スベリ台コスモスの畑へすべりけり
またもとの静けさにをり臑をたたきたり

●松本青志

毒吐いて蚊帳にうごめく女かな
愚かなる愁ひ重ねて梅雨灯す
蛍の闇ふかまれば郷愁に
朱の塔めぐり寒雷はげしかり
ちさき栗職荒れの掌にころころす
夏痩せに耐へて生き抜く鶴嘴を振る
喜憂みな人の世にして麦熟るる
蛍きて薄あかりせる鉄路かな
新樹雨寮の一日を読み暮らす
迷ひ来し坑内の火蛾いとしとも

●大橋裸木

雪やんだ雪の落日
わが戻る蜩の田端をよぎり日暮里をよぎり
さみだれみだれ葉ッぱ葉ッぱ
陽へ病む
梅雨空水が水押してゆく
時雨月夜の屋根草の屋根を連ねてゐる
病人に氷は買つてあつて夜が氷つてくる
ひさびさ坐ればしみじみ寒夜のすみずみ
月のかげおく竹の葉が梅雨のをはり
病む子のそばにはいつも母がゐて雪の下は咲く

●河本緑石

あさひあさひいまし此の雪にもえあがる
あらうみのやねやね
枯蘆に雪つみてより舟が通る
風が落すもの拾うてゐる
麦が伸びる風の白猫
蛍一つ二つゐる闇へ子を失うてゐる
冬の夕焼さびしい指が生えた
とろろとろろ海鳴る昼の魚売り
月夜明るく遠き世の人へ打つ鉦
海ははるかなり砂丘のふらここ

●堀徹

真理欲り木の芽の和毛指に触れぬ
野をふかく来て秋山の襞ひかる
玫瑰や海のゆうぐれひとは言はぬ
壁に夏帽みたりよたりとゆきし友
墓地の十字路黒き日傘の行き過ぎつゝ
千鳥翔てば沖波ひとつ覆る
法師蝉来啼きし木戸に待たさるゝ
秋夜たのし友てふもののあるかぎり
水の周り草かがよへり野分去る
炬燵に来る峡一すぢの蹄の音

●藤田源五郎（十五句）

病むわれに強く生きよと冬薔薇
街路樹のはだうすぐろく冬日射す
ぢぐざぐの闘病記録二月盡く
友去りぬ草矢放てば赭き空
　弟応召
骨肉はかなし悴みつゝ無言

級友戦死

白梅やもののふ死して余栄あり
白樺の怪しきまでに夜は更けぬ
虫鳴くか今更惑ふことなきに
遅く寝る癖いつしかに銀河濃し
瞳の中の海棠揺るる疲れかな
昂ぶれるままに夜となり天の川
母の背に枯木あかるし癒えたかり
窓にまた風花見つつ睡眠りけり
受洗して二日のいのり紅椿
長病みの蚊帳に放ちし蛍かな

●本島高弓

秋風裡兵馬のにほひ街に充つ
秋風を聴くさへ片目憂かりけり
吾子の雛やきしいくさも熄みにけり
木枯しを黙々ときくわれ石か
焦土に虹美しければやりきれぬ
虹とほく　茫茫と地に　わが家族
冬は　とほい谺を待つてゐる　荒磯
茫々と酔つて探すよ　荒野の灯
たそがれは枯木盲の手を曳くよ
月明に　肋骨を焚く鬼となる

●柏原鷹一郎（十二句）

熊蜂が赫い落暉を怒つてる
赤い舌出して狐面の娼婦笑む
山昏れる黒猫屋根のてつぺんに
脱走兵狂ひ殲滅の丘にかへる
ラッセルありふりかえりふりかへり山暮れる
蝶渡る海峡都市に砲響く
雪の天涯もなきかな風伯は
雲迅き蒼茫たる天に銃捧ぐ
泥濘の砲曳く馬と疲れゆけども
夕べ暖かき山みてあれば吃るかな
涙腺涸れ氷はぶつんぶつんととける
氷掘り氷掘り尚生きてあり

●鎌倉鶴丘（十六句）

童の掌大き甘藷得てかけよりぬ
大野分鶏頭一本にきわまりぬ
秋没日がくりとうごく田螺かな
秋の暮駅の白線をたどるつね
初蛍たゞのひとつに帰りけり
山国や木魂に明くる颱風過
寒木瓜の征くに残るに同じ色

兜太征く

柿の朱に征くべき道のありにけり
また病みて晩夏の書棚塵つもる
鯵の頭骨も食らひぬ生きたかり

『寒雷』昭和16年7月号「暖響」欄

出銃の一條つばめいきいきと
かうもりや鳴かず出でては煙塵裡
蚤つぶし南京虫ありか探す
首夏の月槻かたよりに仰ぎける
ふいごの火高まり低まり緑満つ
足かゝへ足を見てをり雷わたる

●高橋鏡太郎

永き日や手の甲匍はすかたつぶり
病める子の枕にのせし蛍籠
愛うすきひととあればよ遠花火
瑠璃空をながれて遠き鳶の笛
悔もなき秋澄む陽ざし鷹の瞳に
時雨るるや追はるる如く夜の坂
夕空に鳩翔ばぬ日ぞわが疲れ
家妻はかなしきものか胡瓜揉み
かくまでによろこぶものを金魚玉
子はいつか父をうとむや木の葉髪

●和田久太郎

五月雨や垢重りする獄の本
しんかんとしたりやな蚤のはねる音
恐ろしき浪の音聞く炬燵かな
きらりぽたり雫す春のおもみ哉
月冴えて石ふることもあらざるか
壁見ても寒し血の湧く爪の跡
淋しさが凝つて蒲公英の花一つ
水洟や冷々として骨を滴る
永き日や幼時偲べの飴太鼓
蒼穹へ菊をさゝげて笑める僧

季刊文科

96 令和6年（2024）夏季号

編集委員
伊藤氏貴
勝又　浩
佐藤洋二郎
津村節子
富岡幸一郎
中沢けい
松本　徹

特集　批評の喜び・書評の愉しみ

対談　斎藤真理子×中沢けい

木村朗子　批評性とはなにか
渡邊英理　批評の言葉を探して
鴻巣友季子　ラスコーリニコフと友だちになりたいかい？
水田宗子　批評とジェンダー
小池昌代　引用のふるまい、思い出すこと
小川公代　『翔ぶ女たち』という批評を書いて
倉本さおり　だいじょばない時代の批評

名作再見
馬場あき子　非在の風景の中で
富岡多恵子　町人の血
竹西寛子　器／二つの祖述

文科（エッセイ）
赤坂真理・樽見　博・梶川信行
蓮坊公爾・矢樹育子・寺村摩耶子

生誕100年へ向け　集中連載　松本　徹「氾濫する『豊饒の海』――三島由紀夫　最後の五年間①」

創作　大道珠貴「くすぐり〈3〉」

残してあげたい――早く逝きし俳人たち

樽見　博

優れた作品や評論を残しながら、早世故に忘れられ埋もれてしまった俳人は少なくない。

彼らが残したものを探し求めて読んでみると、その生きた時代を象徴している場合が多い。

昭和八年に茨城県笠間町（現・笠間市）に、当時勃興した新興俳句に連動し「笠間新興俳句会」を立ち上げた田中青牛という俳人がいた。松原地蔵尊や藤田初巳によって創刊された『句と評論』（昭和6年創刊）の同人で、その支部を全国に先駆け田舎の城下町に設け、地元俳壇に時代の新風を齎した。笠間は私の生まれ故郷で、『句と評論』昭和八年二月号にその小さな記事を見つけた時は驚いた。ところが同年九月号は青牛追悼特集で作品抄と妻みぐさの「臨終記」、俳友橋本桂秋による「笠間俳壇と青牛氏」が掲載されていた。幼い子供二人を残す三十歳の早世であった。青牛は法政大学を卒業後、先輩藤田初巳と同じ保善商業の教師をしていたが、結核の身となり一時鎌倉片瀬で療養後、親兄弟の住む故郷に戻ったのである。初め法政での恩師勝峯晋風が主宰する『黄橙』に属していたが、新興俳句に触れ『句と評論』に参加したのだ。偶然所持していた『氷原帯』という細谷源二が札幌で出していた俳句雑誌二部の片方一九六七年七月号（第27巻7号）が「句と評論・広場」特集で、地蔵尊、湊楊一郎、細谷、砂川長城子、そして関口姓になった妻みぐさが執筆、その中で青牛の「笠間新興俳句会」のことにも触れられていた。みぐさは夫没後東京に戻り俳句を続け、亡夫以上に活躍した。青牛の生涯がおよそ摑めた時、『田中青牛遺句集』（昭和61・三元社刊）を入手した。青牛の妹で俳人原直子が湊やみぐさ等の協力を得て、没後五十年以上を経て刊行した未知の本だ。前記した資料類もすべて収録されている。青牛は依然理もれた存在であるが、私には重い出会いであった。遺句四作を紹介する。

蛙の子にげて深みへ沈みけり
梅雨空に灯れば暮るる橋なりき
秋蛍消ゆる光をたもちけり

苗代にわが灯のとどく住居かな

戦前から昭和30年頃まで、結核は不治の病であり、青年にとって戦死と結核の恐怖は不条理そのものであった。ただ、一部のエリートと一般庶民による違いもあって、重労働の悲劇は下層の者にとってより厳しい現実となる。

小野蕪子が主宰していた『鶏頭陣』に、十代から投句していた松本青志（大正10年大阪生まれ）という大阪の下駄職人がいた。

冬陽射す薔薇に寄り添ひ脈よろし

と言った作品で、結社でも評価されていた。早くに母を亡くし父も病弱で高等小学校卒業後は、一人稼業に奔走、やがて兵隊にとられ、南方を転戦、無事帰還したが、父は既に病死、家も空襲で焼けていた。孤独の身の運命を変えるべく、福岡県粕屋郡宇美三菱勝田炭鉱に赴き鉱夫となった。ところが昭和22年7月5日落盤事故により27歳で亡くなってしまう。その間も俳句は作り続け、旧友川口さゞれの誘いで、中島斌雄が戦後創刊した『麦』に参加、投句を始めたところであった。青志の才能を評価していた川口により、『麦』第二巻七号（昭和22年11月）に川口の追悼文を添えて、青志の遺稿「わが俳句観」と遺作「炭鉱手帳」五句、及び同人九名の追悼句が掲載され、追悼集編纂の協力が呼びかけられた。その遺稿集は同じく早世した安土利一の遺作と合わせ『句集青土』（麦叢書第六編）として八年後に完成する。戦後の経済復興は炭鉱に増産の圧力がかかり、古い体質の残る中で過酷な労働を強いると共に事故も多発した。青志の短い生涯は貧しくはあるが文学に夢を託した当時の青年の、時代に翻弄された象徴的な存在に思えるのである。左は遺句である。

夏痩に耐へて活き抜くつるをふる
炭塵の息梅雨晴の天へ吐く

田中青牛や松本青志のように無名ではないが、目や口を覆うような醜態のみが伝説のように語られる高橋鏡太郎という昭和37年に泥酔し不慮の事故で亡くなった俳人がいた。久保田万太郎主宰『春燈』の俳人であるが、北園克衛や城左門、安藤一郎などモダニズム詩人たちによる『風流陣』や、安住敦、加倉井秋を等の『諷詠派』にも参加、闇の瞳に息づく蛍あまたあて

瑠璃空を流れて遠き嵩の笛
時雨るゝや追はるる如く夜の坂

など清新な作品を発表、またリルケの詩に心酔し優れた評論も残している。重視すべきは戦時中、安住敦の協力を得て、『多麻』の発行人となり昭和19年から昭和20年2月刊行の十四輯まで刊行したことである。この雑誌には全国の多くの著名な俳人や詩人が執筆している。ただ『多麻』は殆ど残っておらず、町田市民文学館にあるのを確認しただけである。

ところが没後、石川桂郎や吉屋信子の著書で、酒場で他人の残した酒を集めて飲んだり、強引に原稿を雑誌に持ち込み金の無心をする、結核療養所では他人の血痰を飲んで退院を伸ばしたとか、事実ではあろうが、才能を惜しむ一方で醜態の限りが描かれ、そちらばかりが独り歩きするようになった。その中で、一人酒亭ぼるがの主人で俳人でもあった高島茂が、最後まで面倒を見ると共に、趣味的な雑誌『帖面』21号（昭和40）で鏡太郎の詩を集め、また特別号として『高橋鏡太郎の俳句』（昭和41）を編集した。汚名を覆す著作である。鏡太郎には生前、「風流陣俳句文学叢書12」『空蟬』（昭和15）があるが、限定百部の稀覯本。右の『帖面』も入手は難しく、鏡太郎の作品に触れるのは容易ではない。それが俳人・詩人としての評価をよそに伝説のみが広がってしまう要因となっているのだ。

私の仕事は『日本古書通信』の編集で、古書業界の人間である。一般の方にくらべれば珍しい資料に出会う機会も多い。そんなことで、これまで『戦争俳句と俳人たち』（トランスビュー・二〇一四）と『自由律俳句と詩人の俳句』（文学通信・二〇二一）を刊行したが、その資料捜索の中で、何人もの早世俳人の記事に出会ってきた。なかでも心に残る、時代を象徴するような俳人十数名の生涯を追い、せめて名のみでも残すべく資料を集め概要を記録してきた。出来れば三冊目としてまとめたいと考えているが、加齢とともに集中と持続力の面でいささか心もとない状態なのである。

最後に右の三人の作品から私の好きな句を紹介しよう。

田中青牛

この奥にわが家あるを冬の山
子の赤い足袋大きくてすましけり
春愁や髯そりのこす顎の下
海棠の葉になる雨に明けにけり
飛ぶ虻の陽に散らしたる花粉かな
提灯に顔あつめたり虫とる子
梅雨晴れや暮れてなほゐる紙芝居

松本青志

星凍つる追憶あまたありにけり
削る木の匂ひにむせび二月過ぐ
兵となる想は多し菖蒲風呂
父と汲む秋寒の酒別れとす
帰還して餘花の中なる父の墓
新樹雨寮の一と日を読み暮らす
ほうたるの飛びゆく鉄路吾も沿ふ

高橋鏡太郎

永き日や手の甲匍はすかたつぶり
愛うすきひととあればよ遠花火
家妻はかなしきものか胡瓜揉み
露葎焦土出づるも憂かりけり
かつて汝が手うつくしかりし寒卵
逢ひ訣るにごれる春のただなかに
愛執に似てサルビアのすがれたる
生と死とあざなふごとき冬にに入る
ジイド死す世はまだ暗き春にして
天城はや雪あるところなきところ
はまなすは棘やはらかし砂に匍ひ